

# 兵庫県現代詩協会 会報47号

2020年7月1日 発行：時里二郎

## 会長挨拶

兵庫県現代詩協会会長 時里二郎

兵庫県現代詩協会の2020年度が始まりました。ただ、新型コロナウイルス感染拡大をうけて、第24回定期総会が開けず、会員の皆様に総会資料を送付して、各議案を書面による承認決議事項の決済というかたちをとりました。やむをえぬ措置として、会員の皆様にはご理解をよろしくお願い申し上げます。

また、今後の活動につきましても、コロナウイルス感染の状況をみながら、その都度の判断をせまられると思います。決議された活動も、あるいは状況によっては変更なり中止なりの判断をせまられることになるかもしれません。なによりも、会員の皆様の健康を配慮することを優先して決めたいと思いますので、ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

一日もはやくコロナ禍が鎮まることを願わずにはいられませんが、会員の皆様もくれぐれも健康に留意されお過ごしください。



## ■第24回定期総会報告

新型コロナウイルス感染防止のため4月7日非常事態宣言が発令され外出自粛要請が5月末まで続行ということで例年5月初旬行う第24回定期総会の開催が危ぶまれた。密閉・密集・密接は避けなければならない。集会を持つのは不可能になったため書面で決議事項を問う形にせざるを得ないということで、4月27日会員全員に総会資料を送付して精査の上承認可否かをがきに記入して5月18日までに事務局宛に返信することとした。その結果、106名の返信を得た。議決事項全てにおいて否認の議決は1件もなく全て承認されていた。会員数134名の半数を超え、総会は成立。書面での実施ではあるが第24回定期総会における議決事項は全て承認されたことを認め成立したものとす。承認された事項は次の通りである。

- ① 2019年度活動計画報告書
  - ② 2019年度決算報告書及び監査報告
  - ③ 2020年度活動計画案
  - ④ 2020年度予算案
- 会員皆様のご協力ありがとうございました。
- ### 2020年度活動計画
- 1 総会
  - 2 ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご
  - 3 ポエム&アートコレクション展・講演会
  - 4 アンソロジー『ひょうご現代詩集2020』発行

- 5 読書会 年2回
- 6 会報発行 年2回
- 7 名簿発行
- 8 文学紀行
- 9 ホームページの活用
- 10 役員選挙
- 11 理事会（常任理事会・詩のフェスタ実行委員会  
含む）  
(報告：山本眞弓)

## ■ふれあいの祭典 予告

### 「詩のフェスタひょうご」

主催 ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご実行委員会  
兵庫県・兵庫県芸術文化協会・兵庫県現代詩協会  
日時 10月3日(土) 13時30分～16時30分  
場所 ラッセホール TEL078-291-1117  
(〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-10-8)

第一部 講演会 詩人 和合亮一氏  
「QQQ～震災十年へ、絶対的質問を巡って～」

### 第二部 自作詩朗読会 奮って応募ください。

朗読申込 8月末まで(詳細は7月配布の案内チラシで)  
参加申込 9月19日(土)までに申込み葉書で  
連絡先 事務局山本眞弓 TEL078-241-3086

和合亮一氏プロフィール 1968年生 福島県出身  
1999年詩集『AFTER』第4回中原中也賞受賞  
2011年3月11日伊達市で被災『詩の邂逅』発表  
2006年詩集『地球頭脳詩篇』第47回晚翠賞受賞  
2019年詩集『QQQ』第27回萩原朔太郎賞受賞  
東日本震災の直後からツイッターで連作詩「詩の礫」を  
発表し続け話題になった。またラジオ福島などで「詩人の  
ラジオ」のパーソナリティーを長年に渡り担当中。

■第9回ポエム&アートコレクション展報告

◇今年度も1月16日から21日まで、会員の詩人が綴った詩とその詩に寄せたアート作品(絵画、書、オブジェ)を組み合わせた展覧会が神戸文学館で開催された。会期中、199名の来館者があり、盛況だった。出品者数 19名。出品者名 阿部由子・岩崎風子・大西隆志・大橋愛由等・和比古・高木敏克・玉井洋子・玉川侑香・寺田操・永井ますみ・西海ゆう子・坂東里美・福永祥子・牧田榮子・松下玲子・丸田礼子・水こし町子・山本彰子・山本眞弓 ◇兵庫・詩の現在展 今年度、事務局に届いた会員の詩集・詩誌が展示された。

◇特別イベント 講演会

令和2年1月18日14時〜15時半 演者・時里二郎 要旨を左記する。

新型コロナウイルスで世間が騒然となるまえ、特別イベントが開かれた。阪神淡路大震災記念日の翌日で、時里氏の講演も震災を受けた衝撃についての話からはじまった。震災で詩は死んだかにもえた、と語りだす。

現実のひとつの限界を知るとは別の現実の地平へと人を高めるのかもしれない。それは認識と魂の高まりを産むのだろう。そもそも詩作にあつて肝要なのは表現技法ではなく認識内容なのだ。表層の現実自身を置くかぎり、皮相な認識内容しかえられまい。内容は詩人の立つ



地平に依じて異なってくる。そして死を潜りぬけ、超えた地平に立ってこそ、命が生きはじめる。親しかったあの人は、六五〇〇人近くの人々は、「どこへ行ったのか」。皆、現実の外へと立ち去った。では現実とは何か。人間はなぜ現実のなかへと立ち現れ、去って逝くのか。……人間とは何か。「どこからきたのか」。これを問いつけるとある日ふと死者の息づかいが感じられるようになる。死者との対話が始まり、詩が命をうる。

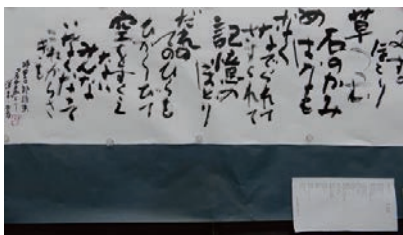
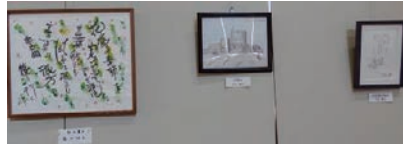
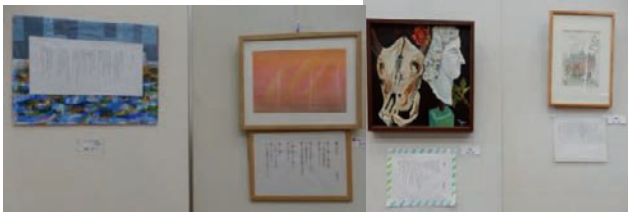
震災のみならず、まえの大戦では日本だけでも三〇〇万人近くの将兵が死んだ。一九四五年三月一七日の神戸大空襲では七五〇〇名。東日本大震災、その後続くツナミ……。多くの人が逝った。皆、どこへ行ったのか。あえて誰も問わない。しかしそれを問うことは別の現実、別の世界への思いを育む。また死者との対話が必ずしも妄想の産物ではないことに気づかせてくれよう。謂わば詩が死ぬことを通して詩は以前にも増して輝きをうる。それは詩人の魂の高まりに呼応して起こる現象であろう。人は言葉によって自分を作る。詩人も詩作することで自分を陶冶する。これに不可避的に伴う現象である。ひとつ気になったのは、「一行だけがじわっとくればよい」と言われたことである。それはそもそもいかなる立場での発話なのか。「よい」とは何に「よい」のか。残る疑問を余韻として講演は盛況のうちに終わった。

(報告・北岡武司)



兵庫・詩の現在展より

詩画展より





■第一七回読書会報告

『辻征夫』 時里二郎 報告：山口洋子

時里二郎さんの魅力なのか辻征夫の魅力なのか、読書会始まって以来じゃないかと思える沢山の参加。いまなら新型コロナウイルスの「3密」で中止であっただろう。開口一番、参加者の多さに思わず時里さんが「ちょっとプレッシャーを感じています」と笑いで始まった。

さて、読書会案内はがきには「チャーターである時里さんの素敵な案内文があった。まずここで、参加しようと決められた方もあったのではないだろうか。その書き出し、《どうしてこんな簡単なことばで、人の心をさらっていつてしまう詩がかかるのか》と。実はわたしは辻征夫の現代詩文庫の最初のものしか見ていなかったし、この詩人あまり興味を持っていなかった、というか難しそうな詩を書く人だならいにか読めていなかった、この言葉に参加を決めたのだった。

時里さんと辻征夫の詩との出会いは、ずっと新しいこと、『俳諧辻詩集』だということ。そのとき感じられた（いままで自分が書いてきた、自分の詩にはない自由な詩なのに心に残る。目から鱗が落ちたように思い、こんな詩を書く辻は最初はどんな詩を書いていたのだろう）と、遡ることにし、読み直し、面白かった、と話を進めていかれる。

読書会なのでざっくりばらんにお話ししたい、と資料の実際の詩を読みながら、懇切丁寧な解説。池井昌樹さんもそうだが、辻も十代の頃に自分は詩人になるんだと目覚めていたとか、そしてその原点がああのリルケの「マルテの手記」の「問いを持ち続けること」の影響だったという。

資料は各詩集からのそれぞれ代表的な、あるいは時里さんが私達のた



めに選んでくださった詩と同じく辻征夫の対談や雑誌からの「言葉」をコパクトに引いてくださった①〜⑥など。

『かぜのひきかた』までは寡作で詩集は少なく、『落日』と『かぜのひきかた』の間は八年空いており、そのあとは同じ年に二冊とか一年おきとか爆発的に出版、そして最大のテーマである、辻征夫の詩はなぜ変わっていったのか、どう変わったのかを『落日』までの第一期と、『かぜのひきかた』からの第二期に分け分析、説明に入られた。自分とは誰なのかという追求は一期も二期も同じなのだが、一期の、特に『学校の思い出』では、純粹だけれど、あるべき自分というものをひたむきにそこに純化させようという、息苦しさで止まっている、若書きもある。『隅田川まで』の「夜道」「棒論」は追求は同じなのに、突き詰める方法ががらりと変わる。自分の中をいくら掘り進んでも行き詰まってしまふ、それよりも自分とは全く違うもの（他者）を置いて自分との距離感をそのもの（他者）と係わらせることによつて自分の位置を確かめる、という方法を考えていった。他者を詩の中にもつてきて、その距離感のなかで言葉をやりとりしながら、自分とは誰なんだろうと考えていくスタイル。対話の詩が増える。ひとり他者を入れることによつて言葉のやりとりの中で詩のなかにふくらみが出て来る、と。そういえば「木」（『学校の思い出』）の、木は／最後まで木でなければいけない／のひたむきさと、「道」の 夜道で／犬と会った／「こんなばんは」／「わんわん」の、どこか和らぎのある書き方、時里さんの説明でよく分かった気になる。『かぜのひきかた』以降では詩に異質なものが出てくる。それも唐突に。そしてそれがその詩の流れを潰すのだが、詩が動き出すのだという。詩の世界を不安定にさせることも大切なのだ。第二期のテーマは滑稽さと悲哀だとも言及された。突然に出てくる（まこしろうどの）や（棒）にも 棒の／過去があり／とかがそうかもしれない。私はこの読書会で耳から鱗が落ちました。

■第十八回読書会 予定

詩のフェスタに向けて、講師・和合亮一氏の詩についての読書会を7月25日（土）13時〜15時 神戸市教育会館203号室で開催。チャーターは大西隆志氏。同封の葉書で参加を申し込んで下さい。締切は7月20日（月）、先着35名まで。（担当：丸田礼子）

■アンソロジー『ひょうご現代詩集』

（第15集）募集

同詩集は隔年で編集・発行されるもので、2020年度は発行年にあたりません。会員のみなさんの作品を掲載・公開する兵庫県現代詩協会の大切な出版事業のひとつです。詩稿の内容についての詳細は、8月にハガキでお知らせします。締切は10月16日（金）を予定しています。資格：兵庫県現代詩協会会員、作品：詩一篇（未発表不問、割付内で複数篇可）、割付：一段組／35文字×37行、二段組：22文字×74行、参加費：ハガキにてお知らせします。予価 3000円。

詩稿送付先：〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 カルメンビル2F 大橋愛由等（担当常任理事）宛  
TEL & Fax 078-331-2228  
E-mail: maroad\_kobe@yahoo.co.jp

文学紀行開催中止 三月十五日（日）に開催予定でした恒例の第七回文学紀行『姫路文学館・姫路城周辺をぶらり歩き』は十六人程度の参加申込があり、姫路文学館、県立歴史博物館を訪ねる計画でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い中止となりました。（報告：大西隆志）

■会員の詩集評

時里二郎

◎『四角いまま』武内健二郎（ミッドナイトプレス）

武内さんの第一詩集だが、驚いた。すでに詩のスタイルができあがっている。しかも、それは現在もっとも輝かし

い成果をあげている詩の流れにもすつと紛れ込んでいて  
も決して遜色のないポエジーの輝きがある。まず、冒頭の  
一編を引用しよう。「マエミゴロ／ウシロミゴロ／ソデタ  
ケ／キタケ／呪文のように／祖母は眩きながら／幼  
いからだの縦横に／物差しをあてていた／一枚の布  
の上に／わたしは／四角くかたどられる／鈴の音は  
風を追い／まえみごろ／うしろみごろ／そでだけ／き  
だけ／わたしはまだ／四角い／まま」（「採寸」全編）ま  
るで幼い「わたし」の身体がふつと消えて、祖母の採寸した  
四角い布に移ってしまったかのよう。第五連の「鈴の音は  
／風を追い」の挿入が、幼年の思い出の臨場感をかき立  
てて、詩に奥行が生まれている——といった説明は野暮だ  
ろう。また、冒頭のカナがあとで、かなに変わってくり返  
される効果も舌を巻く。ただの四角い布から、わたしの身  
体となった四角い布への変化を暗示させている——とい  
う解説も野暮だろう。これは冒頭の一編だが、作品はすべ  
て、この《身体》と《言葉》に関わる。つまり《こころ》  
は厳しく取り除かれている。「あとがき」がこれまた秀逸  
で、「身体が気づいた誰のものでもない何かは、いつか私  
の言葉となって浮かび上がり、ポロリと外へこぼれ落ち  
る。私が誰かに、繋がることを願いながら。」《こころ》が  
気づいた——のではないところに注意しよう。「体位」と  
いう詩の／全編。「約束を果たして／わたしの身は／  
結び目がほどこけた／一本の紐のよう／まだ少し／振れ  
ている」。身体が、少し振れた一本の紐であるという過不  
足のない言葉として裁たれている。まるでキュビズムの  
再来であるかのように見える。余計な言葉はひとつも  
ない。なによりも、《こころ（内面）》が、詩から排除され  
ているのだから、詩の言葉もまた心や内面から出てきた  
のではないことに注目したい。それは身体の触知した感  
覚なり情報以上でも以下でもない。言葉に必要以上の何  
ものも付加しない。そのような詩語が切り開いてみせる  
世界が、いかに新鮮でまぶしく、発見に満ちたものである  
かを味わってほしいものだ。

### ◎『完本 コーヒーカップの耳』今村欣史（朝日新聞出版）

西宮市で喫茶店を営んでおられる今村さんが、喫茶店  
の常連客の話を書き書きたもの。既に19年前に『コー  
ヒーカップの耳』を、上梓なさっている、それにその後の  
記録を添えて「完本」として新たに上梓なさった。戦前・  
戦中から平成まで、よくぞこのような人情味溢れる話や  
個性ゆたかな人物が、今村さんのもとに集まったものだ。  
ほんとうに奇蹟のような本だ。人生の劇的なドラマあり、  
名もない市井の夫婦や家族の物語、いやすべてほんとう  
にその人に起こったこと。ドキュメンタリーなのだ。しか  
し、話に引きつけられるのは、確かに常連客の人間味溢れ  
る個性からにじみ出る魅力のせいではあるのだが、それ  
以上に、それを聞き書きした今村さんの関西弁の語りの  
妙味、聞き書きの文体の魅力に尽きるのではないか。「語  
り」の文体。安水さんはそのような今村さんの詩のスタイ  
ルを「口頭詩」と呼んだが、あえて「語り部」と言ってみ  
たいような気がする。まさに人情味である。おそらく客の  
語ったそのままではもちろんないだろう。客の話を、いつ  
たん彼や彼女の身体から抜き取って、今村さんの言葉で  
再構成し、語り直して、それを風貌や人格の染みついた客  
の身体に入れ直している。石牟礼道子の『苦界浄土』の語  
りをふと思いついたが、つねにその語っている人の目の  
前に今村さんがいることは確かなことだ。最後にもう一  
つ。とにかく、読み物としても第一級の面白さだが、それ  
以上に、庶民という市井の人々の人生は、確かに歴史や時  
代に翻弄されていると改めて思い知らされた。親や子供  
との確執や愛憎や喜びやかなしみ——それこそ人生の妙  
味の背景には、時代や歴史が組み込まれている。これはま  
ぎれもない詩集だが、同時に社会学、民俗学や歴史学にも  
響き合うものを持っているように思われる。

### ◎『野の棺』内田正美（澤標）

真摯で内省的な精神の彷徨をそのまま投げ出したよう  
な印象の第二詩集だ。決してわかりやすい詩集ではない。  
しかし、この詩集にひかれるのは、まぎれもない自分の詩  
の言葉をつかまえようとして試行錯誤し、言葉と組み合  
っている作者の姿勢がひしひしと伝わってくるからであ  
る。作品によく骨や小動物の死骸が出てくる。「散らばっ  
た小さな骨／うち捨てられ 埋もれかけた数々の骨片」  
「すると 洗われていた／あれば わたしが捨てた／わ  
たしの骨／誰にも知られず／いつのまにか去った／きつ  
と 静寂の棺に納められた／わたしの／ことばの骸たち」  
（夢の渚）。また、「詩の余白に墜ちる」では、野鼠や牛の  
臼歯、雀、いなごの干からびた死骸が出てきたあとで次の  
ように続いていく。「おびただしい生の残渣／おびただし  
い死のおいをほこびさる風／ながれていく粒子 不変  
なんてどこにもない／生まれてすぐ死ぬ はたらくと言  
うつまらぬ宝物／（そうかな）／私たちが獲得した不思議  
ないのちの不意な死（以下略）」。詩集のなかに置かれた  
死の、幾重にも重ねられるイメージを納めた「野の棺」だ  
が、その重層する闇の中にこそ、実は生の光が生まれるの  
ではないか——というのが、内田さんの強い思いなのだ。  
「光のくる一点にわたしのこころは向かうが／わたしの  
体は闇へはげしく曳かれている」（野の棺）。その後半部に  
「チロチロと水の流れは住宅地へ下る／風の中にも子供  
達の声がする／水は小川となり流れ／生まれくるいのち  
と／となり死するいのちの／あわくまじわる地の上で／  
はてしない神々の無音の祝祭」。内田さんの詩の言葉が生  
きているのは、それらの闇のなかに隠されている「おびた  
だしい生の残渣」のなから、他でもない自分の言葉を紡  
いでいこうとしているからである。闇のなから光（言葉）  
を見出そうとしている。詩集冒頭の詩は内田さんの詩の  
姿勢がよくあらわれた作品だが、そこには「いつの間にか  
海がひろがり／世界は偽りのことばの満ちる海／よせて  
はかえず波の音／浜辺で文字を拾う／汗に汚れたF O O  
Lな男 無骨な指で触れた／残渣／沈んでいたイの文字

や／横向いたアの文字をちいさく声に出して」（ことばの海）とある。ここにも「残渣」という言葉がでてくる。詩の言葉を、生きることの残渣としていったん闇にくぐらせて、その闇のなかにほの見える光（生の息づき）をとらえること。それが内田さんの詩であるように思われる。

### ◎『繋ぐ 続続地名抄』安水稔和（編集工房ノア）

昨年の『辿る 続地名抄』に続く26冊目の詩集であり、三冊目の地名詩集でもある。「あとがき」によると、地名詩集以前の詩集でも地名を題材にしたものは300編を超えるということだから、102編からなる本詩集を含むと、これまでの地名詩は600編を超える。ほとんどが書き下ろしの作品であるという。『地名抄』の「あとがき」に、「地名とは。／過去の痕跡、記憶の堆積。現在の意識、いのちの発語。未来の標識、予感の音叉。（略）」とある。会報の前号で、「地名」というものが、詩が扱ってたつ言葉の古層に深くかかわり、人の生の営みの全体をふくんだ記憶の宇宙であるとも言える。安水さんの詩のもう一つのモチーフでもある《記憶》の原型的な世界に強く触れている言葉の世界が地名であるとも言える。」と私は書いていたが、そのことはむしろこの詩集にもそのまま当てはめることができるだろう。今回読んで、改めて感じたことは、この地名は確かに記憶の堆積であるが、それが詩を書いている「現在の意識」をまざまざと浮かび上がらせているということである。おそらく旅の記録やそれに触発された記憶をもとに書かれているのだからけれど、それは現在の詩人の息づかいそのものを伝えているということ。言い換えれば、実際の旅の「時間」と、そこへと遡行していく記憶の時間を、言葉は詩人の現在の意識として息づかせている。例えば、この詩集では、1960年の九州への新婚旅行とその37年後の、それとは逆回りの旅の作品が収録されている。また「岩手4編」にも微笑ましい奥様の様子が描かれているのだが、それらの二人の旅の間が、地名に触発された記憶の営みの濾過器をとって、

最愛の伴侶にたいする現在の詩人の意識として浮かび上がってくるのである。そこが、ある意味では今までの詩集にはない新鮮な印象を与えている。「内牧」の全編を引く。「中庭の木々の／枝先が。／やわらかく／濡れて震えて。／／上下する／あなたの白い胸。／あたたかい／あなたの鼓動／／やがてとっぷり暮れて／火口原沈み。／地の響きが／わたしたちの体に伝わる。」

### ◎『耳風目風』たかとう匡子（思潮社）

前詩集『女生徒』から11年目になる。10年あまりの間に、たかとうさんの詩にどんな変化があったのか、あるいはなかったのか。まっさきに気付くのは、詩集のタイトルの「耳風目風」という言葉に象徴されるように、身体感覚の不調や不具合や軋み、あるいは馴染めなさがしきりに書き付けられていることだ。「予期せぬ頭痛／両の手で頭頂を覆って／七転八倒」、起点はたしかにあったのに／終点なく／流れて消えた詩は／／今むやみにわたしの膿瘍をかきむしる」（終行に辿りつくのはいつ）。「肩から腕にかけてのひどいしびれ」（重い荷物）、「なおもつづいている激痛は／あてもなく滑液に満たされ・・・」（二月／骨について）、など任意の頁を開くとなんらかのそうした身体の不具合、違和感、病的な症状や感覚につながる表現がある。それは、一方で身体的な感覚を言葉の受信機として、世界や現実との違和感を増幅していく。あえて言えば、『女生徒』までは、現実世界やものを見つめ切ろうとする眼差しが、重層的なイメージや喩法に磨きをかけて、たかとうさんの詩のスタイルを生み出してきた。しかし、この詩集においては、さらに、その現実の向こう側に広がる深い闇や混沌と向き合う言葉が特徴的だ。言い換えれば、迷宮化をくわえたイメージやカオスのことき深みに、自らの言葉と降りて行くこうとする凄みを、表現の端々に感じるのである。あえてそれを幻視の眼差しと

いっていい。それまでの詩集にはない自在な幻視的な言葉の運動は、一段シフトを変えた新たな詩的達成を目指す

指しているかのようだ。表題作の冒頭の部分を引く。「闇は波立ち／わたし／不在のような気がしてならない／いないという名の地平／掴もうとしてのぼした指先／たしかにさわった／屈折や伸縮／裏返し／耳や目やその風ぎ地図ほど枯れて／誰かが入ってきた気配はするがすでにその町名は沖に流されて／張り詰めた恐怖が横切っていた／闇はなお波立ち／不在のわたし／キンモクセイの内側にもぐりこむ／ささやかな生活の痕跡にさわる／闇は波立ち／虚空に／魚の影」以下略。

### ◎『おもちゃの馬』野口幸雄（澤標）

第一詩集の『妻が出かけた日』に続く第二詩集。野口さんの詩は、『身の丈の詩法』とでも呼ぶべきもの。自らの生活や日常や人生のエリアを詩の射程として、決して身の丈以上の世界へと踏み出さない。それが野口さんの詩の美質を産む。詩の言葉も、身の丈の言葉、ふだんの生活で使っている言葉をそのまま詩語とする。しかし、ここが一番難しい。なぜなら詩の世界は、日常そのものではないからだ。日常から断ち切られた言葉だけで自律した世界を作らないといけない。野口さんは、ここでも身の丈の比喩法を駆使して、表現の簡潔さと軽妙な語り口を磨くことでそれを見事に克服している。この詩集では、幼年・少年時代からの回想を織り交ぜながら、自分の身の丈の自画像を描こうとしているように思える。第一詩集を受け継いだユーモアやペースの妙味はいっそうきりっと詩を引き締めている。そんな絶妙の自画像風の「人生」の全編を。「柔らかにすべすべした肌で生まれて／大きくなれと伸ばしたりさすったり／／ゴム鉄砲を作って遊んだ／五本六本と集まれば怖いものはない／／みんなを束ねるのに／重宝された／／頼りにされて祭り上げられ／傲慢になつて嫌われた／／梯子をはずされ／一人また一人といなくなつた／／雲散霧消／俺は窓際のフックにかけられた／／耐用年数も過ぎ／干からびて切れてしまった／／代わりはいくらでもある／輪ゴムの人生」



## ◎『海のほつれ』神田さよ(思潮社)

『傾いた家』(2015年)に続く第6詩集。前詩集のテーマを引き継いで、神田さんは粘り強い詩作を続ける。『傾いた家』の評で、わたしは「東日本大震災(ひいては阪神淡路大震災)」という越えがたい《壁》に言葉を書き付けているとも言える。しかし、書き付けたその壁の向こう側にあるのは、実は現実の被災地ではない。言葉が紡ぎ出した3・11以後の世界の切れ端イメージがにじんでいる。」と書いている。東日本大震災の被災地をめぐる作品を書き続けながら、それらと響き合うように、戦渦の沖縄や、東京大空襲や、69年の東大紛争などの作品が書かれている。そこには、この人間世界が、生命や人間の心を無残に踏みしめる行為を繰り返しているのはなぜなのか、という問いを発信し続けることが、詩の行為なのだ、という思いが強くこめられている。冒頭の「奏でる壺」は、神田さんのそうした、詩人としての自らの立ち位置と決意を込めた作品のように思われる。「いつからかわたしは壺になって／海の底に没(しず)んでしまった」と始まり、後半には「欠けた傷口に／海草が絡み／小魚が入って来たり出たりしている／穴口から波間に消える／魂の荒い息／記憶の綱はほどけ／喪の明けない海／死者たちの声で／ざらざらした表面は膨らんできた／深淵の潮流にのせて／わたしはひび割れた音を鳴らし続けている」戦争や、震災が引き起こした福島第一原子力発電所の放射能汚染、あるいは、そうした繰り返し起きるカタストロフの事象のみならず、現代社会の不条理なゆがみや非人間的な日常などから、ほかならぬそこで生活し、日常を暮らす《人間》の声や息づかいをとらえようとする。それが《奏でる壺》としての自らの詩の在りかなのだというのではないか。そのままにしておけば失われてしまう無名の人々の声や思いや息づかいを「奏でる壺」として、これからも神田さんの詩の営為は続いていく。前詩集でも試みられていた寓意的な作品も、いっそうシュールな味わい

をくわえているが、同時にぞつとするほどの怖気をふるような作品もあって、読み応えがある。

## ■常任理事会報告

◇二月一日第五回常任理事会・私学会館にて。常任理事十一名出席\*読書会「辻征夫の詩」チューターは時里二郎。参加者三十九名\*ボエム&アートコレクション報告。出品者十九名、出品数二十一点。来館者一九九名。感想ノートは記入者が少ないので再考する。特別イベント講演会「詩を書くという事」時里二郎氏。参加者七十二名(内会員三十五名)\*文学紀行は参加者募集中。\*ホームページはイベントの様子等写真を入れながら紹介する\*次期総会に向けて概要を検討。二〇二〇年五月六日(水・振替休日)ラッセホールにて。講演会講師は大西隆志氏。新入会員の自作詩朗読\*アンソロジー『ひょうご現代詩集2020』第十五集について、総会の承認を経て進めていく\*その他、役員構成と役割について。理事と常任理事を一元化してはどうかという意見が出た。次回役員選挙にて検討。

◇三月二十日第六回常任理事会に代わる協議会。出席者は三役及び会計の四名。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、通常の常任理事会は中止\*三月十五日の文学紀行及び五月六日の定期総会は新型コロナウイルス感染防止のため中止とする。代わりに書面にて総会の議案事項の承認を得ることとする。あらかじめ総会資料を会員全員に送付、返信用葉書にて二分の一の賛成があれば成立とする当日予定していた講演会・朗読会も中止。ホームページにもその旨掲載。

\*会計監査(梅村光明・渡辺信雄)四月十九日県民会館の予定。\*ふれあいの祭典「詩のフェスタひょうご2020」十月三日(土)十三時三十分〜十六時三十分。ラッセホール。講演講師は和合亮一氏\*現在会員数一三四名。

(報告:尾崎美紀)

## ■他団体会報・詩書(2019年12月〜2020年5月)

すずかけ 11・12・1・2・3・4・5月号

(兵庫県芸術文化協会)

いちご通信 25・26号(大分県詩人連盟)

宮城県詩人会会報第30号(竹内英典)

関西詩人協会会報第96・97号(左子真由美)

中四国詩人会ニューズレター第47号(川辺真)

福島県現代詩人会会報第122号(斎藤久夫)

岩手県詩人クラブ会報第95・96号(東野正)

岡山県詩人協会だよりNo.28(斎藤恵子)

埼玉県詩人会会報第91・92号(北畑光男)

長野県詩人協会会報No.143(内川美穂)

秋田県現代詩人会会報第61号(駒木多鶴子)

茨城県詩人協会会報No.29(裕杏子)

栃木県現代詩人会会報第76号(本郷武夫)

中日詩人会会報No.197(古賀大助)

宮城県詩の会会報45号(谷元益男)

群馬詩人クラブ会報No.313(佐伯圭)

大分県詩人協会会報No.156(井手口良一)

福井県詩人懇話会会報102(渡辺本爾)

福岡県詩人会No.176(脇川郁也)

高知詩の会通信22号(林嗣夫)

岐阜県詩人会会報第14号(天木三枝子)

島根県詩人連合会会報No.88(川辺真)

日本詩人クラブ詩界通信90号(北岡淳子)

日本現代詩人会報No.158(相沢正一郎)

2019熊本県詩集第15集(熊本県詩人会)

2019かなざわ現代詩コンクール受賞作品集(石川詩人会)

鹿児島県詩集第23集2019(鹿児島県詩人協会)

秋田県現代詩年鑑2020(秋田県現代詩人協会)

岐阜県詩人集第7号(岐阜県詩人)

島根年刊詩集第48集(川辺真)

呼吸148(現代京都詩話会・司由衣)

鳥第78号(元原孝司)

## ■会員の発行書（2020年1月～5月）

竹内健二郎『四角いまま』ミッドナイトプレス  
 今村欣史『コーヒーカーップの耳』朝日新聞出版  
 安水稔和『続地名抄』編集工房ノア  
 内田正美『野の棺』濔標  
 たかとう匡子『耳風ぎ 目風ぎ』思潮社  
 野口幸雄『おもちゃの馬』濔標  
 神田さよ『海のほつれ』思潮社

## ■会員の詩誌（2019年12月～2020年5月）

別嬢110・111（高橋夏男）  
 Messier54・55（香山雅代）  
 現代詩神戸267・268（三宅武）  
 RIVIERE167・168（永井ますみ）  
 鶴鴿13（江口節）  
 EDGING45（寺田操）  
 遙1号（和比古）  
 あむの木通信131～135号（福永祥子）  
 時刻表7号（たかとう匡子）  
 ア・テンポ56・57（玉井洋子）  
 多島海37（江口節）

## ■会員の動静

黒田ナオ 第28回詩と思想新人賞受賞  
 『水かさの増した川の流れを』  
 時里二郎 日本現代詩人会創立70周年記念・第60回  
 中日詩祭 in名古屋 10月18日（日）2部の講演  
 住所変更 福田学 姫路市夢前町菅生1974-127  
 携帯080-5635-1253

## ■イベント案内

◇日本現代詩人会創立70周年近畿地区イベントin大阪  
 「関西から見つめる、現代詩の過去と未来」中止

於：ホテルアウイーナ大阪（TEL06-6772-1441）  
 2020年11月28日（土）13時30分～17時

◇29回西宮市野外文化事業「野外アートフェスティバル」小学生の詩・書と絵のパーフォーマンス 2020年10月17～18日予定（朝倉裕子・芦田はるみ・和比古・香山雅代・神田さよ・佐伯圭子・佐野博美・中川道子・春名純子・坂東里美・望月逸子・山下輝代）中止

## ■退会（50音順）

井之上幸代、鞍田慶子、法橋太郎、山本美代子

## ■入会（50音順）

荒川 稔 1962年神戸生 小説や児童文学を十年



近く書いてきましたが、四年前から詩も書けるようになりました。よろしくお願いたします。  
 〒658-0064 神戸市東灘区鴨子ヶ原3-1-50302 TEL 078-856-2770 E-mail atani19992000@yahoo.co.jp

## 白い音

四十二年間 住んだ家が  
 斜めに歪んだ樋を震わせながら  
 老いた両親に  
 特別養護へ転居する日のことを語っている  
 中では  
 段ボール箱が思い出を分別している  
 使えるものと 捨てるもの  
 今日が収穫祭の一日であったかのように  
 誰も彼もが忙しく立ち振

「こんな日が来るなんてね」

通り一遍の終活の作業

段ボールたちの足元には  
 消えていたはずの時間が  
 高校生の顔をして

少しだけ顔をのぞかせている  
 黄ばんだ卒業証書とアルバムに挟まれている  
 小さな僕たちは夕日の中  
 轉りはしても 小鳥のように巣立てはしない

語られる言葉も 重ねられた時間も  
 住む人がいなければ灰燼と変わらない  
 現在しか見えない宿命から

斎場で焼かれるときの 白いカタカナ音は  
 誰にも聞き取れはしない  
 長箸でそとつままれて  
 掌の器に入れられる そのときまでは

施錠された硬い玄関から  
 とり残された思い出と 小さな僕たちが  
 出るのは二度とない

本当の出荷日のことを  
 誰も 語らない  
 誰も 知らない  
 何も 聞きはしない  
 （二〇一九年 永瀬清子現代詩賞 入選）

野元 正 1945年東京生 主として小説・エッセイ。



詩作品は『半どん』『玉蘭』『港の灯』『西宮エッセイ』『コーヒータイム』（伊丹）などに掲載。文藝同人誌『八月の群れ』代表、芸術文化団体 半どんの会代表兼事務局長、

「神戸エルマール文学賞基金委員会事務局長・選考委員。第1小説集『幻の池』1997・編集工房ノア、第2小説集『海の萌え立ち』2000・審美社、第3小説集『八景』2004・審美社、第4小説集

『飴色の窓』2010・編集工房ノア、第5小説集『空の  
かけら』2019・編集工房ノア、『神戸市花を巡る文学  
散歩』執筆監修・神戸市。第4回小谷剛文学賞入賞、第3  
回神戸エルマール文学賞受賞、半どんの会文化賞(現代芸  
術賞)受賞、神戸市文化賞、兵庫県文化功労賞受賞。  
〒653-0841 明石市太寺天王町4-2 Tel & Fax 078-9  
12-8549 E-mail t-nomoto3@iris.eonet.ne.jp

### 森羅万象

森羅万象は太古から生き物たちの棲家だった  
荒ぶる神も穏やかな神も賑やかな神も  
ひそやかな神も鬼神も疫病神も

海神 風神 雷神 産土神  
やまのかみ

魍 森林の神 大樹の神 瘟鬼……

森林の真ん中に光の御柱を立てて  
まわり 周囲を神神の磐座で囲んだ

御柱の頂は雲の間にまに霞む

陽の後光——天空に通じる神神のきざし  
八百万の神神が集い踊り宿る依り代

樹樹をふるわす風や神鳴りは 神神の声

おほ 大なる 津波 野分 洪水 山燃え

絶後の寒暖 そして疫病

神神の怒りと戒め

今 森羅万象に宿る神神

みな荒ぶる神になつてしまったのか

悪口 批難 中傷 風評 邪推 いじめ

愛憎 戦争そして得たいの知れない疫病

かつて 神神は 森羅万象に宿り

歓喜の歌を詠っていた

魂は 宇宙を永遠に彷徨って

地球を振り返る

そこからは何千年前の地球が見える

赤い瀕死の地球でなく

紛れもなく汚れない

紺碧い地球号が飛翔していた

八百万の神神が 森羅万象を依り代に

自然とともに 歌を詠っていた

### ■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行って  
り読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。  
詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の  
方を求めています。

入会申込 神田さよ Tel 0798-53-0686

### ■詩賞について

◇第22回小野十三郎賞 対象…詩集」または「詩評論  
書」。2019年7月1日から2020年6月30日まで  
に刊行されたもの。応募期間…2020年4月1日から

7月10日。応募先…〒591-0012 大阪市中央区谷町7-1  
2-2-305 大阪文学学校内小野十三郎事務局。選考委  
員…「詩集」倉橋健一・小池昌代・坪内捻典・「詩評論書」

葉山郁生・細見和之・山田兼士

◇第31回富田碎花賞 対象…2019年7月から20  
20年6月末日までに刊行された奥付のある詩集。ただ  
し翻訳、アンソロジー、復刻及び遺稿詩集、電子書籍は

除く。応募先…〒653-8501 芦屋市精道町7-6 芦屋市教  
育委員会生涯学習課 富田碎花賞担当。応募期間…202

0年5月1日～同年7月31日必着。選考委員…鈴木漠・  
たかとう匡子・時里二郎

たかとう匡子・時里二郎

◇第31回伊藤静雄賞 原稿用紙2枚以内(題名も含む)  
締切…8月31日迄(諫早市芸術文化連盟)

◇第26回中原中也賞 2019年12月1日から20  
20年11月30日までに刊行された現代詩集。  
締切…12月8日迄

詳しくはホームページなどをお読みください。

### ■会計より

今年度の会費を同封の振込用紙でお納めください。

なるべく速やかにお願います。年会費は四千元です。

振替口座 00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会 (担当…玉川侑香)

### ■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局へお送り  
下さい。詩に関するイベント情報の案内、会員の動静もお  
知らせください。連絡先…山本眞弓。

\*ホームページ <http://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/>  
の充実を図るためにエッセイ・評論の投稿も歓迎

です。連絡先…北野和博 soranohito.jp@yahoo.co.jp

### ■訂正

会報46号訂正 関西詩人協会&兵庫県現代詩協会交流  
会「詩で開こうことばと未来」

自作詩朗読者 山川方子(関西)↓山川茂(関西)兵庫県  
現代詩協会参加者 永井ますみさんのお名前が記載され  
ていませんでした。お詫びして訂正いたします。

### ■担当

兵庫県現代詩協会事務局《山本眞弓》

〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-2003

Tel 078-241-3086

会計《玉川侑香》Tel 078-361-1334

会報編集《和比古》Tel 0798-72-9308

印刷《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-1  
31 Tel 06-6304-9325